巻頭言

鈴木徳男

相愛学園は一八八八年の創立で、本年度で一二〇周年を迎えた。去る一〇月一四日には記念式典が本町講堂で執り行われたほか、様々な行事があった（年報本号に報告のあるシンポジウムもそのひとつ）。人文科学研究所は、公開講座を共同で開催することで、記念事業に参画した。また、あしかけ三年にわたって行ってきた研究会の成果を『明治国家の精神史的研究―〈明治の精神〉をめぐって―』（以文社　二〇〇八年一〇月）としてまとめ、出版できたことは、まことに喜ばしい。学園が創立された明治とは、どのような時代だったのか。夏目漱石『こころ』にみえる言葉「明治の精神」を借りてテーマに掲げた、その研究会の活動経緯については、年報に逐次掲載してきたほか、同書「あとがき」（嘉戸一将）の中でも詳細に記した。同書の内容のあらましや紹介は、年報本号に載せた書評（鳥井正晴）を参照されたい。

明治という時代は、同書「序にかえて」で私が述べたように、まさに〈揺らぐ近代〉であった。最後に、日本人として初めてノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹の著『旅人―ある物理学者の回想―』（角川文庫による）から拾ってきた一文を引く。

明治―。

その名は私に、アルコール・ランプの上に置かれたフラスコの水が、次第に熱せられて、沸騰していく過程を思わせる。